

世界からみた木曾の魅力 ～本気で遺産をまもるためには～

木曾町在住・昆虫学者 永井信二

私は主として熱帯アジアの昆虫類(特にコガネムシ上科)の分類をほぼ40年ばかり手がけてまいりました。それゆえ日本の生物についてはほとんど無知な状態です。けれども木曾町で数十年暮らすうち、日本とアジアとの比較が(想像の上ではありますが)少しばかり可能になってまいりました。蝶やカミキリムシ等は収集家や研究者も多いことからよく調べられています。他の大半の昆虫類や小型の生物には名前の無いものが今も多数生息しています。この状況は世界の熱帯域でも共通の状況です。驚くべきことに、生物に関与する研究者やアマチュアが日本ほど多い国は他に存在しません。それでもなお、生物の種類数を正確に表現することは現状では不可能です。それだけ研究の進んでいない分野が多々存在するという事なのです。



講演をする永井氏

第二次産業革命後に爆発的に拡大した文明と云う名の正義の下に、一種類の生き物の為だけに自然は破壊され続けています。「木曾地域が特別な地域」と云えるのは実は都会から見た場合で、地球全体が「世界遺産」であるとの認識が欲しいと思います。また、今、世界的な傾向として世界自然遺産(World Natural Heritage)に登録されることがさも美德のように言われます。けれども、本来遺産は未来に託す財産ですから、登録された時点でそこは特別な許可が無い限り立ち入ってはならない聖域(サンクチュアリー)だと考えるくらいの思想が欲しい。この名称が観光振興のために有効だなどと勘違いする御仁が多いのには違和感を覚えます。欧米の精神がもたらした「ナショナルパーク」が日本では遊び場と認識

されてしまっている点に気が付いてほしいのです。

オオイチモンジというタテハチョウ科では比較的大きな蝶が長野県のやや高地に生息しています。本種は本県のほか群馬県と栃木県でも絶滅が危惧されており、採集禁止にされています。本種は旧北区(きゅうほく)全体と北アフリカや中近東そして日本の長野県から北海道のやや高地に分布しています。高緯度では平地にも生息しています。この蝶は世界的に見れば普通種と呼んで差し支えなく、実際に標本商では300円から500円くらいの価格で販売されています。

但し本州産となると10倍から100倍の値がつくことがあります。本種を貴重と考えるならば採集規制が必要かもしれませんが、そうであるなら同時に規制対象種の飼育観察(生態調査)を前もって綿密に行うべきです。

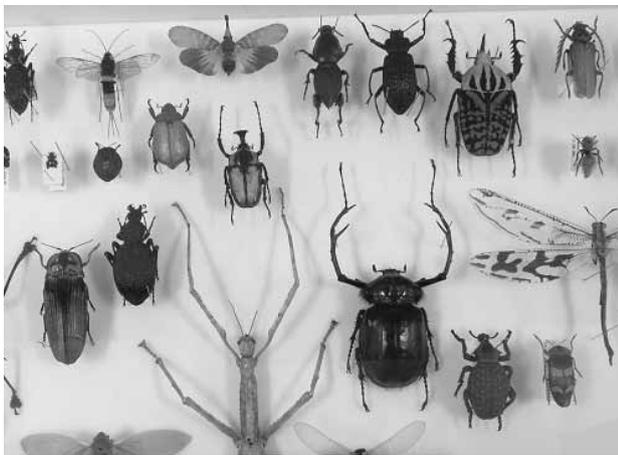


オオイチモンジ(写真提供:大塚)

蝶に限ったことでは有りません。商業種(こんな言い方はありませんが)ならば規制がかからないと云うのもおかしなことです。たとえば、駿河湾を中心に生息する世界最大の節足動物のタカアシガニは年々漁獲量が減り、過去にはオスの挟足を広げた大きさが3メートル以上のものはそれほど珍しく無かったのですが、今では大きな個体が得られることが非常に稀といった状況です。観光目的とした採集圧により、本種が激減しているのが現状です。ところが保護の声が上がる一方で、未だに栽培漁業が確立した状態にはありません。この世界最大の節足動物に保護の規制が掛からないのは、対象が「商業種」であるからです。

このような深海の生物の生態を知ることは困難です

が、それに比べれば陸上のは至極容易といえます。絶滅間近となってから腰を上げるのではなく、欲しい方がおられるなら飼育したものを養鶏や養豚と同じように販売すれば良いのではないのでしょうか。また特別の区域を設けて、管理下の元に採集して頂く環境を整えるのが理想ではないでしょうか。これには幾つかの利点があります。まず何時でも安価で購入できるとなるとコレクターはとたんに興味を失う傾向にあり、密猟が少なくなるでしょう。また飼育の経験値が高くなると、絶滅の危機に備えることができます。そしてもし特区で採集が可能となると、マニアの狩猟欲を満たすことが可能になります。さらにいえば、採集禁止の高山植物についても同様のシステムの導入が可能だと思います。



永井氏所有の昆虫標本（一部）

自然保護を訴えるとともに、「自然遺産」を遊び目的の観光地と勘違いをして訪れるような方々が、結果的に負の財産を孫やひ孫に残す結果とならないよう、本気で遺産をまもるための声を上げていくことが今の私たちに託された責務ではないでしょうか。



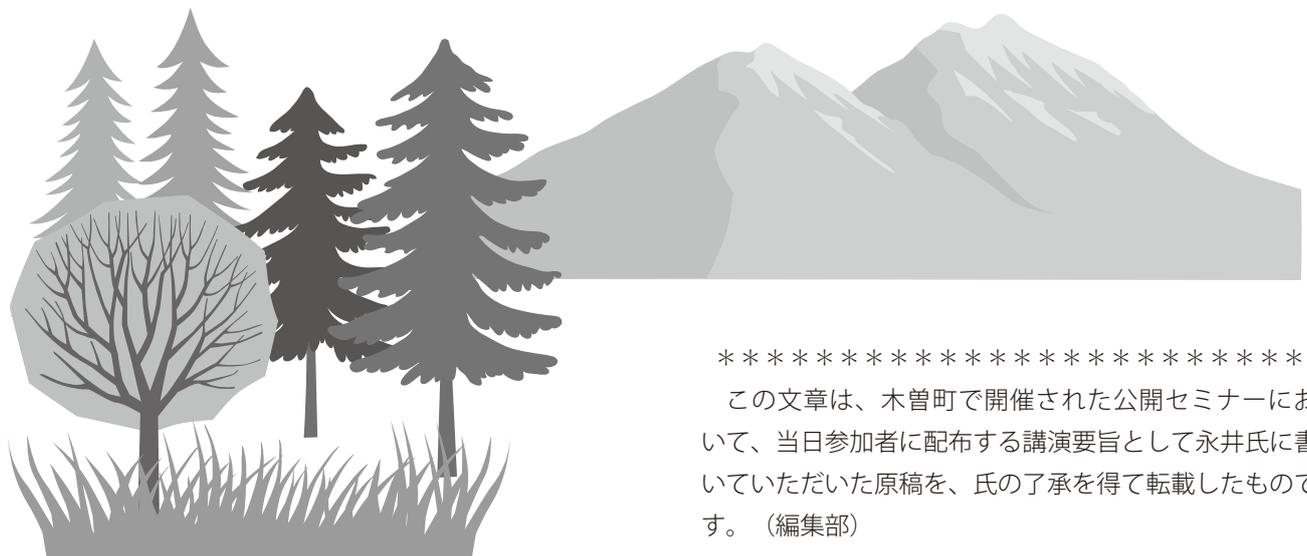
永井さんの世界の昆虫標本展示に見入る若者たち

永井信二氏 プロフィール

愛媛県松山市生まれ。

愛媛大学農学部環境保全学科昆虫学研究室や吉井良三氏（京都大学名誉教授）の元、独学で昆虫学を学ぶ。ニューギニアなど東南アジアを中心に、のべ滞在日数2200日を上回る生物調査の実績をもつ。国内外の公立の博物館や研究施設、研究者らと交流が深い。平成10年より木曾福島町（現木曾町）に転居し、現在に至る。

「世界のクワガタムシ大図鑑」（共著：月刊むし社）をはじめとする数多くの図鑑類の執筆や監修を手がけ、またこれまでに250種以上の新種や新亜種の記載を含む多数の原著論文を発表していることで知られる。



 この文章は、木曾町で開催された公開セミナーにおいて、当日参加者に配布する講演要旨として永井氏に書いていただいた原稿を、氏の下承を得て転載したものです。（編集部）